

## 山上憶良とその「沈痾自哀の文」

長谷川 鑛 平

### 1

岩波文庫の創刊されたのは昭和二（一九二七）年七月十日であった。一茶の『おらが春・我春集』をはじめ二十二点。続いて八月一日付、『古事記』など五点、次いで九月五日付、佐佐木信綱編『新訓萬葉集』上巻が出た。ドイツのレクラム文庫に学んだのであろうか、☆一つが百ページ内外で、単価二十銭、『萬葉集』上巻は☆四つで、定価八十銭であった。菊半截、いわゆる文庫判で、紙装、総ページ四二二であった。次いで下巻は同年の十月十日に出た。三四〇頁、☆三つ、六十銭であった。

現在、上巻、五五〇円で、下巻四五〇円、あれから戦争を挟んで五十余年になるとはいえ、インフレもさることながら、物価がケタ違いに暴騰したことには驚く。のっけにとんだ事を書いてしまったが、私が初めて萬葉集を読んだのは、岩波文庫が創刊されて間もなく、昭和二年の秋から冬にかけてであったと思う。二十歳前後の、向こう見ずの蛮勇で、何の心用意もなしに、古語の知識もほとんど無しで、ぶっつけに読んだ。解説書も手もとにはなく、手頃な古語辞典も当時は恐らく出版されてなかったので、全くの徒手空拳で萬葉集を読んだのであった。それで、けっこう分かった（と思えた）

し、従ってけっこう面白かった。三、四カ月で上下とも読み通し終えたことと記憶する。感激、ひとしおならざるものがあった、その結果、若干の愛誦歌も出来たし、とりわけ柿本人麻呂らの長歌に傾倒し、当時夢中になっていた短歌に、大胆な模倣をこころみたりして、やや得意であった。

若干たつて、友人から土屋文明の、後年『萬葉集私注』にまとめられた注釈本の、巻二かの部分を貰い、読んでみたところ、私が無用意で、ぶっつけ本番に読み、理解できたつもりで感激していたのが、実は、おおむね私の個人的私解で、専門家から見れば、文字通り誤解・誤訳に類するものであったことを知った。そこで文明の私注に従って読み直してみると、意味はなるほど一往通るが、索然として、いっこうに私の心胸に訴えてこない。これはおかしい。文字の意味が大体正しく分かり、全体の大意がほぼ大過なくつかみ得られれば、その歌の詩的理解もおのずから達成されるはずで、詩的鑑賞享受も当然、盛り上がって来てよいはずなのに、いっこうに面白くもないものになってしまった。

これはおかしい、と、そのとき痛感した。外国文学を読む。原文で読み、もしくは翻訳で読む。わからないところも少なくないが、それでいて、けっこう面白い。あとから検討してみると、かなりの

割合に誤解・誤積がまぎれ込んで、この誤解・誤積がむしろ読後の感興を盛り上げるのに役立っていることを、ままた知った。縁遠いものに感激し、その結果、こちら側の感興と創意がかき立てられるのには、事実上は、こちら側の誤解と勘違いが、積極的にあずかってかなり力あるものであることを、知らざるを得なかった。古典というものについても同じようなことが言えるのではなからうか。

つまり、私が若き日、萬葉集に打ち込んだのは、注釈もなしに、いきなり読んで、私なりに受け取ったことに依るところが多かったようである。素人は古典に対してはこれでよいのではないかとも思った。例えば『源氏物語』は、言語的に歯がたたない。従って受容のしようがない。そこへ行くと『古事記』、『日本書紀』、さては『竹取物語』、『落窪物語』、『伊勢物語』などは、我流に読んで、一往分かったような気がするし、且つけっこう面白い。素人はそれでよいのではないかと私は思い、私は多年、学生諸君に『萬葉集』をいきなり通読・読破することをすすめてきたが、それを真に受けて実行してくれた者は、甚だしく乏しかったようである。同じ『萬葉集』でも武田祐吉校註の角川文庫本は、些少ながら脚註があるので、あの程度の補強があれば、けっこう味読できるはずなのであるが――。

## 2

あらでもの前置きが長くなってしまった。

五十年前、そういう読み方で、山上憶良の「痾に沈みて自ら哀しむ文」を読んで驚嘆これを久しくしたことを、今に覚えている。いつの日か、その、岩波文庫で五ページ余り、ほぼ六ページの長文をじっくり読み返し、考えてみたいと思いつつながら、半世紀経ってしまった。本年、特定個人の知的業績に伝記をからめて、哲学なるものを

考えてみようという思いつきに従って、まず山上憶良を採り上げたについては、私としては、叙上のような私史―秘史があったわけであるが、大講堂での講義のテーマにしたことは、まんまと失敗であったし、今、読み返してみると、仰仰しい表現にもかかわらず、内容は案外に貧素で、当時の最高知識人の、知的レパートリーをのぞき見することは出来るが、憶良の本音は、ついに聞き取り得ないような気もする。憶良が案外に俗物で、生涯、孜孜として学んだものをひけらかしてはあがるが、多年の病苦に苦しみ疲れて、いたずらに陳腐な愚痴をならべ立てているように見えてしまう。当時、エッセイとか、小論文というような表現形態が、まだわが国に開発されていないなかったので、憶良にしても、どう表現してよいか、――長歌として、うたい上げるのならばともかく、哲学的に自分の考えをつきつめて述べることは、たやすく出来なかったのかも知れない。

憶良は、例えば『抱朴子』を愛読したらしいが、それなら、せめてあの形式を学んで、存分に、彼のひそかに信じていたところを吐露しておいてくれたら、と悔やまれる。

それにしても「子等を思ふ歌」とか、「貧窮問答の歌」とか、特異な問題を取りあげながら、ついに相聞の歌を一首ものこさなかった憶良は、やはり、それなりに変わっていた。恋愛することが男一人前の資格の一つでもあった当時、恋愛歌を一つものこさなかった――作ったかも知れないが、残らなかった――歌人は、これをしも歌人というなら――憶良以外、『萬葉集』にはひとりも類例が見出されない由である。

## 3

さて、ともかくも「沈痾自哀の文」に入ることにしよう。素人の

悲しき、誰かの訓読したものに抛らざるを得ないが、若干考量した上で、大体、日本古典文学大系本『萬葉集』二（高木市之助・五味智英・大野晋校註）の訓読と、澤瀉久孝の『萬葉集注釈』の訓読とを折衷し、それに若干の私意を加えたものにした。（ただし、なるべくルビを避けるため、可能な限りひらがなにしてみた。）

〔一〕ひそかにおもひみるに、朝夕に山野に佃食する者すら、猶し災害無くして世をわたることを得、〔原割注・以下同〕謂ふところは、常に弓箭を執り六畜を避けず、あふ所の禽獸、大小、孕めると孕まざるとを論ぜず、並びに皆殺し食ひ、これを以ちて業とする者をいふ。〕昼夜河海に釣漁する者すら、尚し慶福ありて経俗を全くす。〔謂ふところは、漁夫潜女のおの動むる所あり、男は手に竹竿を把りて能く波浪の上に釣り、女は腰にノミ・カゴを帯び、潜りて深潭の底に採る者をいふ。〕況んや我胎生より今日に至るまでに、みづから修善の志あり、曾て作悪の心無し。〔謂ふところは、諸悪莫作、諸善奉行の教を聞くことをいふ。〕ゆゑに三宝〔仏法僧〕を礼拝し、日として勤めざる無く、〔毎日誦経し、発露懺悔するなり。〕百神を敬重して、夜として欠くること有るなし。〔謂ふところは、天地の諸神等を敬拜するをいふ。〕ああ恥しきかも、我何の罪を犯してか、この重疾に遭へる。〔謂ふところは、過去に造る所の罪か、もしくはこの現前に犯す所の過なるかを知らず。罪過を犯すこと無くして何ぞこの病を獲む。〕初め病に沈みしよりこのかた、年月やや多し。〔謂ふところは、十余年を経しをいふ。〕この時に年は七十有四にして、鬢髮斑白、筋力わう羸〔弱く〕、ただに年の老いたるのみにあらず、またこの病を加ふ。諺に曰く、痛き瘡に塩をそそぎ、短ぎ材の端を切るといふは、此の謂なり。四肢動かず、百節皆いたみ、身体はなはだ重く、猶し鈎石を負へるが如し。〔割注略〕布に懸りて立た

むとするに翼折れたる鳥の如く、杖によりて歩まむとするに足なへたるウサギウマのごとし。

一まず、ここで切ることとする。御覧のように丁寧な訓読して貰えば、現代の常識人もその意のあるところを、ほぼ正しく受け取ることが出来る。（ただし、終り近くの「布に懸りて立つ」は、いろいろ説もあるらしいが、われわれ素人には分からないし、また分からなくても一往差支えはない。）仏教がはいって、もはや相当たつているので、生活のためにはいえ、狩猟や漁業をして、鳥獸・魚介のいわゆる命あるものを捕食しなければならぬ矛盾を痛感している趣きが見える。憶良は官僚なので、さいわい、直接、殺生にたずさわることにはなかつた。しかし、時に獵師や漁夫、海女の捕ったものを食膳にのせたことであろう。さりながら、日頃修善の志はあつても作悪の心はいささかもなく、せいぜい良心的な生活をいとなもうとし、またいとなんできた。それにもかかわらずこの重い病に沈んで、苦渋多端、いっこうによくならない。すでに発病以来十余年。そのうえ七十有四歳、かなりの年寄りになつてしまつた。その年とつて弱つてるところへ、この重い病気が重なつた。それでなくても痛い瘡に塩水をぶっかけ、短い木の端を更に切り縮めるとはこのことだと、憶良は老来、重疾になやまされる自分をなげいている。

「我胎生より……」という措辞には、人間に生まれ得た幸福がひそかに言いこめてある。仏語では、生物の生まれ方を胎生・卵生・湿生・化生の四つに分ける。哺乳類は、カモノハシ以外、みな胎生であるが、どうやら憶良は人間として生まれた幸福を言っているのである。それよりも私は「諸悪ナスナカレ、諸善ヲ行イ奉レ、自ラ其ノ意ヲ淨クスル、是レ諸仏ノ教ナリ」という法句経述仏品の偈

の援用してあるのに一驚した。この偈は現在、仏教関係の集りなどで、誦せられている。文化の伝統の悠久なことに改めて感銘せざるを得ない。

しかし、このようにつとめて日常、仏教を信仰して生活をつつしみ、仏のみならず、もろもろの神さまをも敬重しているのに、こんな重い病気にかかってしまった。しかもいっこうによくならないで、長年月を経ってしまった。病気にかかってしまったからには、自分としては意識しておらぬが、何か業因がなくてはならぬ。それは過去に作つた罪か、現前に犯している過ちか、何れかに因るのでなくてはならぬ、と憶良は、病気の由つて来たるところを、モラルの領域に求めている。石川啄木に、たしか、病気を嘆いて、「その因るところ深く且つ遠きを思ふ」というのがあって、私も青年時代、長く結核に悩まされていたとき、何の因果でこのような業報を受けなくてはならないか、とひそかに悲嘆したことがあった。

ところで、憶良のこのような繰り言めいた嘆きの蔭には、憶良も敢えて表明しようとはしない。或る不安が秘められているようである。というのは、この往年の最高知識人も、ひそかに「祟る神」への恐怖をいだいていたのではないかと臆測されるのである。諸悪莫作、諸善奉行、篤く三宝を敬重して日頃の生活も慎重にしているのに、かくも年来重病に苦しめられている。これは或いは或る祟る神に差し障ることがあって、そのために人知れずこのわざわいを受けさせられているのではないかと、という不安である。これは無論憶良に限ったことではない。

例えば、私が「野菊考」（長野大学紀要・八二年三月）で言及した柿本人麻呂の「讃岐の狭岑の島に……死れる人を視て」の歌。これは長歌二・二〇〇に反歌二首二二二・二二二がつけてある。瀬戸内海

航海中の人麻呂が何かの都合で狭岑の島に接岸して仮泊したところ、そこでたまたま野垂れ死にしている旅人の屍を目撃した。誰しも多少の感慨は無きを得ないであろう。しかし、長旅の途次、行きずりの感慨としては、かなり長い長歌に反歌二首、これは少し大げさ過ぎはしまいか。と思うのは私ども近代人の心性で、実は、当時の人は、晴らし得ぬ怨恨をいだいて非業の死を遂げた人の怨霊を、恐怖したのである。往生できないで、中有にさまよっている霊。その霊はさぞかし行きずりの人にも、何らかのきっかけを得て取りつき、救済を得ようとしていることであろう。そんなタタル霊に取りつかれてはかなわない。そこで、そういう屍に出くわしたときはせいぜい手厚くとむらって、どうか理不尽のかかわりを、たまたま通りがかっただけの私に持たないでくれ、というわけで、この場合の人麻呂も、せいぜいの好意を手向けているのである。

原始心性には、われわれを取り巻く空間は、善悪の霊でいっぱいであつたらしい。一往の神性を得て一往の落ちつきを得ているものは、よい。そうなれないで、中途半端にさまよっている霊、もしくは、せつかく得た神、ないし巫神の地位を転落して悪霊となつて落魄しているもの（もののけ）。そういうものが、何かのきっかけで、当人には思いも寄らない祟りを、及ぼしているのかも知れない。そういう不安が、当時の最高知識人「憶良」にもあつたのではないかと私は臆測せざるを得ない。

## 4

それよりも、ここのあるところに、初めて痾に沈みてより十余年、しかも今、齢は七十有四である、という重大な言及がある。ところで、この「沈痾自哀の文」の草せられたのは恐らく天平五年（七三三）

であろうとされている。そこで一往、これを天平五年とすると、憶良は六六〇(斉明六)年に生まれたことになる。そこで、逆算して、取り敢えず憶良の略年表をこしらえてみることにした――

#### 山上憶良略年譜

- 六六〇(斉明六) 憶良出生。於百濟? 父、憶仁。  
 六六三(天智称制二) 八月 白村江の大敗。百濟ついに滅亡。  
 憶良四歳。  
 六六七(天智称制六) 三月 都、近江滋賀大津宮に移る。  
 憶良、八歳、既に近江にいたか。  
 壬申の乱。憶良十三歳。  
 六七二(弘文一・天武一) 父山上憶仁、没。憶良二十六歳。  
 六八五(天武一四) 紀伊行幸の際の歌一首一・三四。  
 六九〇(持統四) 山上憶良、四十二歳、遣唐少録  
 七〇一(文武・大宝元) 正月 遣唐執節使・大使・副使任命。  
 山上憶良、四十二歳、遣唐少録  
 に任ぜられる。時に無位。  
 七〇二(大宝二) 六月 遣唐船発路、憶良四十三歳。  
 七〇四(文武・慶雲元) 七月 遣唐執節使粟田真人ら帰朝。  
 憶良(四十五歳) 従って帰朝し  
 たものと思われる。  
 憶良、従五位下(五十五歳)。  
 七二四(元明・和銅七) 伯耆守(五十七歳)。  
 七二六(元正・靈龜二) 東宮(後の聖武帝)の侍講(六  
 七二一(元正・養老五) 十二歳)。  
 七二六(聖武・神龜三) 筑前守(六十七歳)。  
 七三一(聖武・天平三) 萬葉集五・八八六以下六首の歌

#### 七三三(聖武・天平五)

の、筑前国守山上憶良とある序に、天平三年六月十七日とあるので、この頃まで筑前に在任したことは確実。七十二歳。

五・八九四一六「好去好來の歌」の末尾に天正五年三月一日山上憶良とあるから、この時、まだ在世していたわけであるが、それから間もなく没したものと一般に考えられている。

黒板勝美編『更訂国史研究年表』には天平五年六月山上憶良歿、七四、とある。

#### 山上憶良略伝

「ブリタニカ国際大百科事典」によると(中西進執筆)、憶良、出生は未詳だが、六六〇年、百濟(クダラ)に生まれたかと思われる。齊明天皇六年にあたる。時にクダラは、唐の援助を得た新羅(シラギ)と交戦中で、日本軍の救援もむなしく六六三年ついに滅亡した(白村江に日百連合軍大敗)。そのとき、少なからざる政府要人その他が日本に亡命したらしい。

『日本書紀』によると、六六五(天智称制四)年クダラの男女四百人を近江国神前郡かんざきに遷し、翌年にはクダラ人二千余を東国へ、さらに六六九(同八)年にも、男女七百余人を近江国蒲生郡かみうに移居せしめた、とある(上田正昭『帰化人』一五九頁)。

それら要人のうちに、知識や技術をもって近江の朝廷に出仕した

ものが若干あり、その中に医に長じた憶仁わくになる者がいた。憶良はその子で、四歳のとき、父と共に亡命してきたものと思われる。憶仁は琵琶湖のほとりのある山（現在の滋賀県水口町の山であろうか）に住み、従って「山上」と称し、天智・天武両帝の侍医として仕えた。その死は六八五（天武十四）年、憶良二十六歳のときであった。

その家柄と父祖の影響の下、憶良は漢籍に通じ、何らかの形で宮廷に出仕し、仏教經典書写の仕事に従事したようだ、と中西進は言う。写経の仕事はむしろ、下級官人の日の当たらぬ役である。おそらく二十年近いこの下積み生活は、後の民衆詩人憶良の原体験ともなったであろうが、しかし一方、この仕事を通じてより多く漢学の素養を積み、多くの仏典にも接し得たであろう。かくして積み得た学識によって彼は、若き皇子たちのブレーンの一人ともなり、持統天皇の行幸には、その資格で参加したのであるうか、朱鳥四（六九〇）年秋九月、持統天皇の紀伊国の温泉に行幸せられたとき、紀伊国の磐代で、川島皇子のために憶良が代作したものとされる歌が『萬葉集』巻一にある。

一・三四 白浪の浜松が枝の手向草 幾代までにか年の経ぬらむ  
はたして憶良の作なら、彼の作歌の『萬葉集』における初出である。

やがて天武天皇の五（七〇一）年正月、もはや四十二歳であった憶良に、彼の後半生を決定づける人事が行われた。クダラ滅亡以来、中断されていた中国派遣の使者——遣唐使が再開されることとなり、執節使は栗田真人で、他に大使・副使が随行する。その一行に憶良は最下位の書記官（遣唐少録）としての命を受けたのであった。四十二歳にもなつて、憶良はまだ無位であった。この第七次遣唐使

団の出発はその年はうまくいかなかった。翌大宝二（七〇二）年六月には出帆でき、玄海灘の荒波を乗り切つて唐の都長安に赴くことができた。学問に沈潜する者として、ひそかにあこがれていた唐の文化にまのあたり接することができた。時あたかも則天武后の末期、初唐文化の極盛期であった。ところでこの時の遣唐使は、三回に分かれて帰国した。第一次は執節使栗田真人らで、慶雲元（七〇四）年七月一日に到着、第二次の副使らは、三年ほどの後の慶雲四（七〇七）年三月に、そして最後になった大使らの一行は、長期の在唐を余儀なくされて、次の元明朝をも過ぎて、元正朝の養老二（七一六）年の年末も押しつまつて十二月十三日によりやく帰国した。憶良は第一次の栗田真人の一行か、もしくは第二次の遣唐副使の一行に随つて帰朝したものらしい。『萬葉集』巻一に、「山上臣憶良大唐に在りし時、本郷を憶ひて作れる歌」

一・六二 いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

というのがある。これは『萬葉集』中、国外——唐で作られたことの明らかな唯一の作品の由である。在唐二年余りか、もしくは五年、四十歳中頃の熟年期に、学究的好奇心に燃えていたろう憶良には、かけ代えない二年ないし五年であったはずである。

憶良は和銅七（七一四）年従五位下を授けられて、上流貴族の間入りをし、靈龜二（七一六）年伯耆守となった。五十七歳、重任を終えて中央に戻ると、こんどは東宮侍講の一人に任ぜられた。養老五（七二一）年、六十二歳。渡来者の出身で、唐の学問を現地で研鑽してきた経験はあるとはいえ、当代一流の学者たちに伍しての榮達であった。その皇太子が後の聖武天皇で、聖武は憶良の人物学問を敬重したらしい。やがて神龜二（七二五）年の秋か、翌三（七

(二六)年に筑前の国守に任用される。聖武の治下である。六十七、八歳。北九州は遠国ではあったが、従来から最も重要な国の一つであり、もはや老境にはいつた彼にも、働き甲斐のある職場であった。これに当時、長官である大宰帥には、あの有名な大伴旅人がいた。

筑前は中央政府直下の都でない上に、唐の文化のはいってくる玄関口でもあり、文人長官旅人を中心に、自由な文芸的・学問的世界がつかわれていた。憶良の文業も、まるで沃土を得たかのようににわかにかわかれていた。憶良の文業も、まるで沃土を得たかのようににわかにかわかれていた。折から、旅人の、かなり年のへだたつてうら若い妻が世を去った。このことは、旅人ばかりでなく憶良にも大きな衝撃を与えたらしい。それに、「沈痾自哀の文」によると、天平五(七三三)年某月の時点で、「初め痾に沈みしより十余年」とあるので、これによってその十年前を考えると、七二三年、即ち養老七年となり、憶良が伯耆の国守から帰って東宮の侍講になっていた頃にさかのぼる。だから憶良は、すでにひそかに悩み始めていた宿痾をいだいて、筑前の任国にはるばるやってきたわけである。

その彼が、長官とはいえ、年齢は自分より五歳程若い旅人が、はるばる都からやってきた若い妻を喪つて悲嘆にくれる姿を見て、身につまされるものがあったことと思われる。(これは私の密かな臆測ではあるが、憶良自身、年齢のかなりへだたつた若い妻に、年老いてからの子を産ませていたのではあるまいか。それでなくては、あのやや常規を越えた子への愛情は、素直には受けとれない。)いずれにせよ、「憶良は以後、「人間とは何か」を主題とした詩文を次々と作つた。人間であることにおいていだがざるをえない愛、しかもそのゆえに苦しさをえない現世の人間、そうした人間であることにおける愛の苦しみを、逃れることのできない現世の苦しみとして、「惑へる情を反さしむる歌」「五・八〇〇〜一」や「子等を思ふ歌」

〔五・八〇二〜三〕などにうたった」と中西進も熱っぽく解説しているが、私としても全く同感である。

## 5

憶良の出自・略歴も若干わかったので、ここで再び「沈痾自哀の文」に戻ることにしよう。

〔二〕吾、身已に俗を穿ち、心も亦塵にわづらはざるを以ちて、禍の伏す所、祟の隠るる所を知らむと欲りし、龜卜の門、巫祝の室、往きて問はざる無し。まことにあれ、いつはりにもあれ、其の教ふる所に随ひ、幣帛を奉り、祈禱せずといふこと無し。然れどもいよいよ苦しみを増すこと有り、曾ていゆること無し。吾聞く、前代多く良医有りて、蒼生の疾患を救療しき。楡枿、扁鵲、華他、秦の和・緩、葛稚川、陶隱居、張仲景等のごとくに至りては、皆これ世に在りし良医にして、除きいやさすといふこと無し。〔割注略〕件の医を追ひ望むとも、敢えて及く所にあらず。若し聖医・神薬に逢はば、仰ぎ願はくは、五臓を割き剝り、百の病を抄探し、膏肓の隙き処に尋ねいたり、〔割注略〕二豎〔病氣〕の逃れかくるを願さまく欲りす。〔割注略〕

一往、ここで切ろう。

憶良は「抱朴子」を愛読したらしいとある。「抱朴子」は晋の葛洪、号・抱朴子(二八四―三六三)の著で、三一七年成立、内篇二十卷、外篇五十卷。内篇は主として神仙のことを説き、外篇は人事・道徳・政治などを論じてある古典。

そこで私は泥縄式にその現代語訳(平凡社、中国古典文学大系8所収、本田濟訳)をのぞいてみた。そして驚いた。本田訳が抜群に

すぐれているためか、まるでモンテーニュのエッセイを読んでいるような感じであった。

葛洪が内篇において執拗に力説していることは、仙人は努力次第で誰にでもなれる、仙人学んで至るべし、ということである。従って、仙道、神仙の道は架空ではない、ということである。しかも、その論法はきわめて合理的、経験主義的であって、かなりの説得力をもっている。そこに恐ろしく近代的なものを感じると共に、かの、道教にいわゆる「三尸の説」がそのまま継承されて、立論の基礎の一つとされていることは、驚きであった。まず

「天地には過ちを司る神があり、人の犯した罪の軽重に随ってその算(命数)を奪う。算がへると、その人は貧乏したり、病気になるったり、たびたび心配事に遇う。算が尽きればその人は死ぬ。算を奪わるとき罪状には数百条あり、一一述べきれない」

とある(巻六・微旨、中国古典大文学大系8・五〇頁)。また、こうもある。

「人の身中には三尸という虫がいる。三尸とは、形がなく、実は靈魂・鬼神のたぐいである。この虫はこの人を早く死なせたいと思っている。人が死ねば虫自体は幽霊となって思いのままに浮かれ歩き、死者を祭る供物をむさぼり食べることができからである。そこで庚申の日になると、いつも天に昇って司命(人の命数を司る神)に申し上げ、その人の犯した過失を報告する。そのほか晦日の夜、かまどの神もまた天に昇って人の罪状を報告する。罪の大きな者に対しては紀を奪う。紀とは三百日である。罪の小さな者に対しては算を奪う。算とは三日である。」(同上)

この習俗がわが国に伝わって、いわゆる庚申待の行事となっていたことは、言うまでもない。

さて「このことが本当か嘘か、私もまだ、確かでない」と、葛洪

自身もことわってはいるが、先に引用した憶良の「沈痾自哀の文」の冒頭の「自分は修善の志あつく、かつて作悪の心なく、日夜三宝を礼拝し、百神を敬重しているのに、何の罪を犯してか、この重き疾に遭い、病に沈んでからもうかなりになるのにいつこうによくならない」というの嘆きの裏の深層心理には、「抱朴子」を介しての、道家の「三尸の説」がわだかまっていたのではないか。さればこそ憶良は「我何の罪を犯してか、この重き疾に遭へる」ということになり、そこで「禍のひそんでいる所、祟りのかくれている所」を、何とか知ろうとして、卜者の門や御祈禱師の家を倦まずたずね歩き、その教示のままに、幣帛をささげて心からお祈りをした。しかし、病苦はいや増すばかりで、いつこうに軽減しなかった。

そこで楡村・扁鵲以下、当時、東洋の文化世界に中国で良医・大医とせられていた人人の名が列挙されている。いずれも「抱朴子」に見えるものばかりである。楡村(兪村)「黄帝の時の名医、伝説的。扁鵲」戦国時代の名医、釈尊時代、王舎城の名医者婆蹉キバ、[Pitṛā]と並べて考婆扁鵲と並び称された。華他「後漢の名医。和と緩は秦の良医。葛稚川は「抱朴子」の著者抱朴子の葛洪自身で、煉丹のことには精しかったが医者ではない。陶隱居は梁の陶弘景で、抱朴子同様、神仙家で養生を説いた。張仲景は後漢の医・張機で、あの有名な「傷寒論」の著者。このあとに長い割注があつて、例えば華他について、「腸を剝りて病を取り、縫いて復膏を摩る、四五日にしていゆ」などと、魔術めいたことが書いてある。もしそういうことが可能ならば、自分もそうしてほしいというので、「若し聖医・神薬に逢わば、仰ぎ願わくは、五臓を割きわり、百病をさぐり出し、病巢の奥深いところまでメスを入れて、病気の逃れかくれているところをあばき出してほしい」と、憶良は、まことに熱のこもった書きぶ



りをなしたのであろう。

6

〔三〕命既に尽きて、其の天年を終るすら、尚し哀しとなす。〔聖人、賢者、一切含靈、誰か此の道を免れむ。〕何ぞ況んや生録半ばならずして、鬼の為め枉殺せられ、顔色壯年にして、病の為に横困めらるるをや。世に在る大患、いづれかこれより甚しからむ。

〔志恠記に云はく、広平の前の大守北海の徐玄方が女、年十八歳にして死す。其の靈、馮馬子に謂ひて曰はく、我が生録を案するに、当に寿八十歳ならむ。今妖鬼の為に枉殺せられて、已に四年を経たり。ここに馮馬子に遇ひて、すなはち更に活けることを得たり、といへるは是なり。内教に云はく、瞻浮州の人は寿百二十歳なりと。謹みて案するに、この数必ずしもこれを過ぐることを得ずといふにあらず。故に寿延経に云はく、比丘あり、名を難達と曰ふ。命終の時に臨みて、仏に詣でて寿を請ひ、すなはち十八年を延べたりと。ただ善く為くる者のみ天地と相畢ふ。その寿夭は業報の招く所にして、その脩短は随ひて半となるなり。未だその算に盈たずして、すみやかに死去す。故に未だ半ばならずと曰ふなり。任徵君曰はく、病を口より入る。故に君子はその飲食を節すといふ。これに由りて之を言へば、人の疾病に遭ふは、必ずしも妖鬼ならず。それ医方諸家の広説と、飲食禁忌の厚訓と、知り易く行ひ難き鈍情と、三者目に盈ち耳に満つること、由来久し。抱朴子に曰はく、人はただその当に死なむ日を知らず、故に憂へざるのみ。若し誠に羽翮して期を延ぶることを得べきを知らば、必ずまさにこれを為さむ。これを以ちて覩れば、すなはち知りぬ、我が病はけだしこれ飲食の招く所にして、自ら治むること

能はざるものか。』

ほんとうに超人的な外科的療法を行いうる医者にめぐりあえるなら、憶良とても、ぜひその手術を受けてみたいところであるが、やはりこれは高踏的な神仙譚と言うほかない。治療の見込みどころか苦痛の多少の軽減を希望することすら許されない。期待されるのはただ、死のみ、絶望的な死のみ。そしてそれまでの堪えがたい苦痛。命根——生命力が尽きて、もはやどうしようもなく、与えられた寿命を終る——これは賢愚を問わず、生きとし生ける者の免れない事実であるが、このことだって、やはり、とても哀しいことである。私憶良は、自分の少しもあざかり知らぬ罪報が積もり、そのため命数を大幅に削り去られて、天寿半ばならずして鬼のために殺されるのだ。これより甚だしい禍がまたとあらうか。ここに鬼とは、言うまでもなく、冥府で人間の寿命を取り扱っている下級役人のことで、恐らく情も容赦もない冷血漢とされていたのであろう。

本文では、「志恠記に云はく」以下は長い割注になっている。しかしこれは大へん面白い。『志恠記』は『志怪記』で、すでに失われて今は見る由もないが、怪異を語った六朝時代の小説の一つであった由。しかし、憶良の言及している「広平の前太守北海徐玄方の女」の話は、『搜神後記』だの、『法苑珠林』だの、『太平広記』だのに載っている由で、割注において、その女の靈が話しかける馮馬子というのは、晋の時代に広州の太守であった東平の馮孝将の子の、名を馬子という二十歳余りの青年で、その青年が夜、ひとり既の中に寝ているところへ、徐玄方の女の幽霊があらわれたというわけである。その馮馬子にどのような意向と力があって、不当な死を強いられ、すでに四年を経っていた彼女に、どのようにして寿命をとり戻

してやる事ができたのか、全く分からない。冥土のイザナミの命は、死後、そんなに経たないうちに夫のイザナギの命が尋ねてきたのに、おそかった、もう私は冥土の食べものを食べてしまったので、この世への復帰はどうもむづかしいと答えている。冥土ですでに四年もたってしまったのが、馮馬子のおかげで、徐玄方の女は、この世に復活することができた。これは憶良にとって、羨しい限りの話であったに違いない。

徐玄方の女の寿命は八十余歳であったが、一般にはどうであるか。ここに内教とあるのは仏典のことであるが、その仏典に、須彌山の南方海中にある瞻浮州、つまり南瞻浮州、南閻浮提、すなわちわれわれの世界では、人の寿命は百二十歳とある由。注釈書によると、

『法苑珠林』(四)には「閻浮提人、寿命不定、有<sup>二</sup>其三品<sup>一</sup>、上寿百二十五歳、中寿一百歳、下寿六十歳、云云」とあるそうである。せめて百二十歳ぐらゐまでは生きたい、ということであろうか。

せいぜい善根を積めば、もつと生きられるかも知れない。「寿夭は業報の招く所」だからである。しかし、ひところの人生五十、とはだいぶケタが違う。昨今はだいぶ長生きになって、女八十歳、男七十二・三歳が平均寿命だそうであるが、ともあれ定命百二十歳のところを、いろいろの罪業で削減されて、せいぜい生きて七、八十歳。

当時すでに「病は口より入る」ということがあったとは、これもまた、驚きである。「病は口より入り、禍は口より出ず」とつながっていたのかも知れない。故に君子はその飲食を節した。食欲と嗜好に任せて、不摂生に飲食してならないことは、当時最高の知識人であった山上憶良の、最もよく承知していたことで、且つなかなか実行の容易でないことには日頃苦んでいたことであろう。「これにより言えは、人の疾病に遭へるは、必ずしも妖怪ならず。医術関係諸

家の説くところと、何を摂り何を避くべしという飲食禁忌の、おろそかにできぬ心得と、何ごとも知り易く行いたいという人間の愚かさ、この三者は、すでに久しく目にし耳にきき、承知の上にも承知しているのに、やはりおろそかにしがちである。しかも、結局のところ、自分はいつまで生きられるのか、やはりはっきりしないので、却って平然とかまえておられるのだ、云云。

「これを以ちて觀れば、乃ち知りぬ、我が病はけだしこれ飲食の招く所にして、みづから治むること能はぬものか。」この慨嘆は、まさに憶良の、いつわらぬ感懐で、且つすこぶる健全な反省でもある。

## 7

〔四〕帛公略説に曰く、伏して思ひ自ら励ますに、かの長生を以ちてす。生は貪るべく、死は畏るべし、と。天地の大徳を生と曰ふ。故に死人は生鼠に及かず。王侯たりといえども、一日氣を絶たば、金を積むこと山の如くなりとも、誰か富めりとなさむ。威勢海の如くなりとも、誰か貴しとなさむ。遊仙窟に曰く、九泉下の人は、一錢にだに値せじと。孔子曰く、之を天に受けて、變易すべからざるものは形なり。之を命に受けて、請益すべからざるものは寿なり、と。「鬼谷先生の相人書に見ゆ。」故に生の極めて貴く、命の至りて重きことを知る。言はまく欲りして言窮まる。何を以ちてか之を言はむ。慮らまく欲りて慮り絶ゆ。何に由りて之を慮らむ。惟以れば、人賢愚となく、世古今となく、ことごとに嗟嘆す。歲月競ひ流れて、昼夜も息まず。「曾子曰く、往きて反らざる者は年なりと。宣尼臨川の嘆きも亦是なり。」老疾相催して、朝夕に侵し動く。一代の歡樂、未だ席前に尽きざるに、「魏文が時賢を惜しむ詩に曰く、未だ西苑の夜を尽きざるに、にはかに北邙

の塵となる、と。」千年の愁苦、更に坐後に継ぐ。「古詩に曰く、人生百に満たず、何ぞ千年の憂をいだかむ、と。」夫の群生品類のごときは、皆尽くること有る身を以ちて、並に窮り無き命を求めざるなし。ゆゑに道人・方士みづから丹經を負ひて名山に入りて、薬を合する者、性を養ひ神を怡よばしめて、以ちて長生を求む。抱朴子に曰く、神農云ふ、百病癒えずして、いかにぞ長生を得むと。帛公又曰く、生は好き物なり、死は悪しき物なり。苦し不幸にして長生を得ざる者は、猶し生涯病患無きを以ちて、さきはひ大なりとなさむか、と。今吾病の為に悩まされ、臥坐することを得ず。東に向ひ西に向ひ「かにかくに」為す所を知らず。さきはひなきことの至りて甚しき、すべて我に集まる。人願へば天従ふと。もし実あらば、仰ぎ願はくは、ただちにその病を除き、さきはひに平の如くなるを得む。鼠を以ちて喩となす、豈愧ぢざらめや。〔割注略〕

さて、最後の段落にきた。「帛公略説」は今日失われて見る由もないが、『抱朴子』には二、三言及されている。神仙の書であろう。「みづから励ますにかの長生を以ちてす。生は貪るべく、死は畏るべし」と、なかなか名文であるのに今更ながら驚く。「天地の大徳を生と曰う」とは『易』の繫辭下にある語の由であるが、『抱朴子』でも巻十四「勤求」はこのことばで始めてある。憶良はかなり深く『抱朴子』に打ちこんでいたらしいが、「沈痾自哀の文」の構想そのものも、『抱朴子』に示唆されたところが、かなり多いのではないかと思われる。ところで抱朴子は、というのは『抱朴子』の著者葛洪は、道家の秘伝として重んじた長生の法なるものを、この上ないものとして疑わない。「勤求」という題名を、本田濟はこころにくくも「一心に求

めよ」と邦訳している。葛洪は、不老長生は可能である、方法宜しきを得、条件を十分にとのえて、十二分の努力を持続してやめなければ、必ず到達し得て仙人になることができる、と言う。この主張に対して憶良がどう反応したかは、わかりかねるが、随処に見出される辛辣な言辭には、憶良も、恐れ入って、おすおすながら同感を禁じ得なかつたことであろうと思う。たとえば、『抱朴子』卷二「論仙」（仙人の實在を論ず）に、次のような文章が見出される。

「私はただの布衣、それに貧乏である。家は四方に壁が立っているだけで何も無い。腹はいつもペコペコ。仕事をするには手伝いの人手がない。家には目を楽しませる美人もいない。しかも心配事は山のように心を攻め、数数の難儀がわが門に集まる。かような暮らしては、この世に未練も残らない。時にその道の秘訣をかいまみ、時に拔群の師匠に行きあつても、なお老妻・幼児にうしろ髪ひかれ、故郷の地を思い切れない。一步一步死に近づき、日に月に、知らず知らず老いばれてゆく。不老長生が得られるということは知りながら、修行もならず、名利にはしる俗世間を憎みながら、しかも捨て切れない。なぜなら、慣れ切つた愛情は俄かには絶ち切れず、世を捨てる志は簡単には遂げられないからである。云云。」

こういうくだりを読んだとしたら、憶良はさぞかし、自分の裸像をまざまざと見せつけられる思いを禁じ得なかつたのではなからうか。自分は不老長生などと、不相応なことは高望みしまい。今さらそのような大それた企て、努力も始められない。しかし、せいぜい善行を積み、慎独にはつとめているつもりだ。だからせめて健康を返してくれ。

憶良は悲泣し、絶叫している。こういう見地からかえり見ると、「子等を思ふ歌一首并に序」に

しても、何か言訳がましい序をつけたりして、一般に受けとられて  
いるように、子への純粹な愛情を吐露したものとばかりは言えない  
ようである。

「……いづくより来たりしものぞ まなかひにもとなかかりて  
安眠し寐さぬ」。これは恐ろしい執着であり、地獄の苦患でもある。  
とても「しろがねもくがねも玉も何せむに まされる宝子に如かめ  
やも」と綺麗事に済まし、安易に流すことのできるようなものでは  
ない。

\*

少し「抱朴子」に引きつけ過ぎて、憶良には迷惑な解釈を加えて  
しまったかも知れない。「沈痾自哀の文」のすぐ次に「俗道の、仮に  
合ひ即ち離れ、去り易く留り難きを悲嘆する詩一首、并序」という  
のがあり、その序において、仏教と儒教との二つを並べ挙げ、「引導  
は二つなれども悟を得るは惟一つのみ」と、すこぶるまっとうな人  
生観・死生観が展開し、「故に知りぬ、生るれば必ず死あることを。  
死をもし欲せぬときには生れざるに如かず」と、平静ながら、ベシ  
ミステイックに結んである。

そして次に五・八九七―九〇三「老いたる身に病を重ね、年を経て辛  
苦み、また児等を思ふ歌七首長一首六首」がある。いささか二番煎  
じめいた短い長歌ながら「年長く病みし渡れば……ことことは死な  
なと思へど さばえなす騒ぐ児どもを うつてては死には知らず  
見つつあれば心は燃えぬ かくかくに思ひわづらひ 哭のみし泣か  
ゆ」と例の愚痴をこぼしている。五・八九九「術も無く苦しければ  
出で走り去ななと思へど児らに障りぬ」。

そうしてあの五・九〇四―九〇六「男子名は古日を恋ふる歌三首」で  
萬葉集巻五は終わっている。余りにも有名な作品であるが、反歌の

稚ければ道行き知らじ幣はせむ黄泉の使負ひて通らせ  
布施置きてわれは乞ひ禱むあさむかず直に率去きて天路知らし  
め

は、よく小林一茶の「そのけそこのけおん馬が通る」と連想され  
るほほえましい佳品である。

\*

ともかくも、この整わぬ一文を終えて、さて、憶良はどういう病  
気に多年悩んだのであろうかと反省してみても、それが何であったの  
か、さっぱりわからぬのが、いかにも残念である。有名な五・八九  
二「貧窮問答の歌」では、トリビアルなほどの描写を敢えてしてい  
る憶良が、病状の詳細に関しては、立ち入っては述べていない。

そしてもう一つ、「沈痾自哀の文」のところどころに挿入されてい  
る割注は、どうも憶良自身、老婆心から自らさしはさんだもののよ  
うである。もっとも中には、後に、後人の文字通り注として書き加  
えたものも、あるかも知れない。しかし、この割注のところと興味  
をそそる記述がむしろ多い。全体としてはともかくも力作・長篇で、  
先に食い足りないなどと生意気なことを言うたが、やはり、『萬葉集』  
中の異彩であることに変わりない。